

白梅子育て広場 10年の成果と課題

What kind of Outcome and Problem did THE SHIRAUMEGAKUEN Get by activities In a Parenting Support for 10 Years?— from the Survey by Questionnaires to Undergraduates, graduates, Teaching Staff Members and local residents.

小松 歩・瀧口 優 (短期大学保育科)・佐久間 路子 (発達臨床学科)
森山 千賀子・井原 哲人 (家族・地域支援学科)

I. はじめに

白梅学園短期大学で「子育て広場」の活動が始まったのは2004年9月である。実際は準備期間があり、当時の教員が教育活動の一環として取り組んでいた活動(世代間交流、紅茶の会、障害児など)、白梅幼稚園が子育て支援の一環として実施していた「ひよこの会」、小平市内で活動していたNPO法人子育て広場きららによる白梅学園内での広場開催、さらに教員と学生との共同による「あそぼうかい」を新たに実施することとし、広場のねらいや対象など特徴の異なる7つの「子育て広場」を実施してきた。以後、学生の自主的な学びの場とすることを目指してこれら7つの「子育て広場」を継続し、地域と連携した教育実践を重ねてきた。その積み重ねの中で2006年度には文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」に「子育て広場を介し地域と学生を繋ぐ短大教育」として採択された。2005年に白梅学園大学子ども学部の開設以降、大学・短期大学の教育活動の一環として「子育て広場」の実践を本格的に位置づけ10年以上経過することから、子育て広場活動全体について振り返り、成果と課題をまとめた(『白梅子育て広場』10年の歩み2016)。本論では、在學生、卒業生、白梅学園教職員、地域住民を対象に実施した質問紙調査結果を中心に「白梅子育て広場」10年の成果と課題を述べる。

II. 10年間の「広場活動」の特徴

1. 10年間の活動の変化

白梅子育て広場は「子育て支援」活動であると同時に、そこに関わる学生の「主体的な学び」を支援する活動でもある。そこで特色GP採択終了後も大学・短期大学としてこの活動を継続することとし、教育・福祉研究センターの活動として位置づけるとともに、授業科目として「子育て広場特論」(2014年度から「地域子育て支援演習」)も継続することとなった。また、広場に参加した学生や授業を受講した学生を中心に組織した「GP学生委員会」も毎年メンバーが入れ替わりながら継続した。一方、学生指導で重要な役割を担っていた「指導員」体制をそのままの形で継続することは困難となったが、文部科学省の教育支援人材に関する6大学連携事業が審査を通り、白梅学園大学に担当者を置くことが可能となり、子育て広場の指導員だった方に担当を依頼し、子育て広場についても側面的な指導をお願いした。この間、GP学生委員会に関わる学生が大学4学年から短大2学年の全学年が揃い、上級生から下級生へと学びを伝え合う体制が確立した。さらに白梅学園大学子ども学部子ども学科の第一期生が卒業した頃から、卒業生の多くが白梅子育て広場の活動に関心を寄せて、折りに触れて活動の支援をしてくれることも大きな特徴であり、2011年には子育て広場にかかわった卒業生がLinkを発足し、卒

業後も卒業生同士が学習会や交流会でつながるとともに在学生の関係も大切にしてくれている。

図1には2007年から2015年に開催された各広場の開催回数と参加者をまとめて示した(学内で実施した各広場の他、学外での広場の活動やGP学生委員会の活動も含む)。年間ののべ開催

回数は2011年を除き40回前後とほぼ横ばいである。2011年度は子どもの広場の学習支援ボランティアに参加した回数が22回、GP学生委員会による活動が21回と多かったことによる。また関わる学生数ものべ500人程度である。

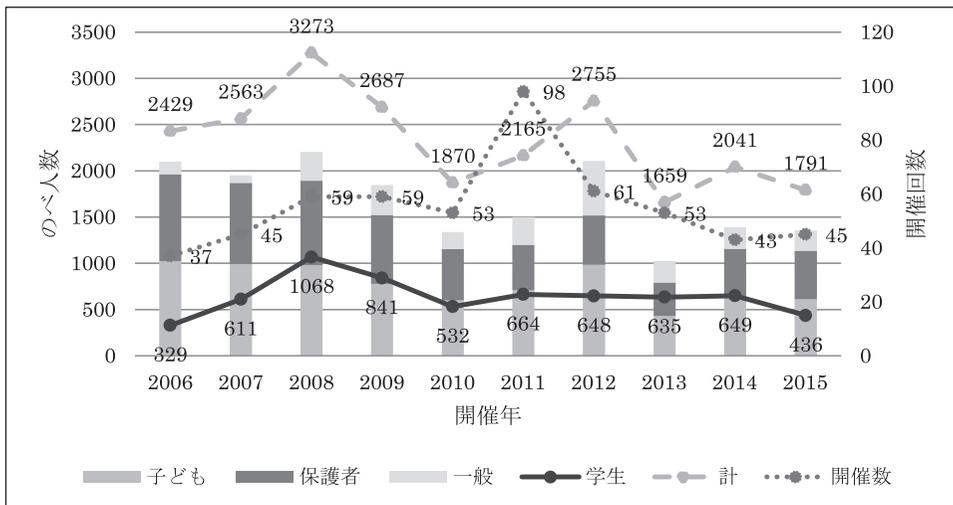


図1 子育て広場の開催数と参加者

白梅学園の場合、子育て広場を実施するための専用施設はなく、各学科とも資格・免許の取得を可能とするカリキュラム構成のため、学内で広場を開催する回数を増やすことには限界がある。また実際に広場を開催する際には、時間を作り出して準備をすることも必要である。そうした制約があるなか毎年活動を継続してこられたこと自体大きな成果と言える。

またのべ参加人数も必ずしも増えてはいないが、各年度運営に携わったGP学生委員会の学生たちは「活動を継続したい」「地域とのかかわりをさらに発展させたい」と願い、年度ごとに目標を決め広場の企画・運営と平行して広報活動に力をいれるなど工夫してきた。

2. 学生と地域とのつながり

「白梅子育て広場」は「子育て支援」活動であるとともに「学生支援」活動であると述べた。その大きな特徴にGP学生委員会組織がある。この

委員会がしっかりと位置づき機能するようになるにあたっては、2006年GP採択の年から3年間の指導員の指導・援助の役割がとて大きかった(詳細は「大学における地域と学生をつなぐ子育て広場」報告書2009参照)。学生たちの思いを大切にしながら、時に厳しくかかわっていただいたことで学生たちは着実に成長した。また、白梅子育て広場の活動目標を明確にすること、計画的に活動し、活動後の振り返りでは成果と課題を明らかにすること、これを次の活動や目標に結びつけること、こうした活動サイクルが学生たち位置づき、現在まで継続している。

2007年から開始した「子育て広場特論」は短期大学の授業科目であったため短大生が多く履修していたが、毎年大学の子ども学部生も聴講という形で参加があった。2008年には50名の短大生が受講したがこの年に中心的に活動していた学生たちが次年度GP学生委員会に残ったこともあり、子育て広場の活動がより活発になった。

2008年度の参加学生は「子育て広場特論」受講生以外にも意欲的な者が多く、新たな取り組みも行われた。各広場に代表学生を位置づけ、積極的な広報に結びつけること、GP学生委員会での役割分担（広報、渉内、渉外等）、また年間の活動計画を立て、サマーディキャンプやシンポジウム等の企画には代表を立てることで内容の充実を目指した。これらGP学生委員会の学生の成長や「子育て広場特論」を通じた学生の学びの成果につい

ては、これまでの報告を参照されたい（瀧口・瀧口 2006、小松他 2008、瀧口・金田 2009、佐久間他 2012）。

GP学生委員会を中心に毎年開催している「白梅子育て広場シンポジウム」は、その年度の活動を振り返る場であるとともに、問題提起を行って地域の方たちと今後の方向性などについて考える場でもある。表1には各年度に実施したシンポジウムのテーマを示した。

表1 白梅子育て広場シンポジウムテーマ一覧

年度	シンポジウムテーマ	話題提供者(敬称略)
第1回 (2006)	地域をつなぐ子育ての“輪” ～子どもと親とわたしたち～	広場代表の学生
第2回 (2007)	みんなでつくる子育て広場 ～地域と学生をつなぐ声～	NPO法人子育て広場きらら 奥野宏子 デイサービスオリーブたかの台 柳井康信 小平市社会福祉協議会 澤口節子
第3回 (2008)	子育て広場は“わ”の広場 ～子育ての輪・笑顔の和・地域の環～	NPO法人子育て広場きらら 奥野宏子 デイサービスオリーブたかの台 柳井康信 広場参加者・KASA(小平市自閉症を考える会)山下真理
第4回 (2009)	みんなでつくる子育て広場 ～つながりから生まれる学生と地域の育ち合い～	広場参加者 海野 薫 小平市立小平第六小副校長、村松守夫 小平市社会福祉協議会こだいらボランティアセンター 内田 伸
第5回 (2010)	明日をつくる子育て広場 ～未来につなぐ学生と地域の学びあい～	東村山市子育て総合支援センターころころの森 石井知子 広場参加者 海野 薫 小平市立小平第六小学校副校長 村松守夫
第6回 (2011)	子育て広場は人と人とがつながる場 ～地域に踏み出す新たな一歩～	小平市社会福祉協議会 子ども広場職員 姫路真由美 NPO法人地域福祉ネットワーク第二こだま 鈴木大智 広場参加者 高橋佐知子
第7回 (2012)	子育て広場で広がるつながり ～みんなで育てる地域の子ども～	NPO法人こだいら自由遊びの会 足立隆子 NPO法人ワークスコープ 児童館職員 三浦知也 広場参加保護者 小川夏子
第8回 (2013)	学生ができる子育て支援 ～安心できる場所づくり～	広場参加保護者 小川夏子 ほっとスペースさつき 渡辺穂積 NOP法人子育てサポートきらら 奥野宏子
第9回 (2014)	地域に根ざす子育て広場 ～広がる取り組みとこれから～	子ども教育宝仙大学 永澤 玲 帝京平成大学 親子広場「プリプリキッズ・ユニバ」 倉茂花苗 共立女子大学発達相談/支援センター「さくらんぼ」三輪穂奈美
第10回 (2015)	学び ～学生と地域～	第二部 参加者全員がグループに分かれ話し合い テーマ「子育てしている親子が住みやすい地域」

毎年のテーマや話題提供者をみると「子育て広場」を契機として「地域とのつながり」について毎年違った視点で具体的に考えようとした軌跡がわかる。当初は学内で実施する「子育て広場」をどうしたら「地域とつながる場」にしていけるかといった問題意識からスタートしている。「あそ

ぼうかい」「世代間交流広場」「きらら」など広場を重ねるなかで、継続して参加する子どもや保護者、高齢者との関係が深まってくると、広場の会場でも「〇〇さん、こんにちは」と名前呼び合え、お互いに「顔がわかる関係」が広がっていった。これまで「地域」という抽象的な言葉で表

現していたことは、「〇〇さんの関係」であり、そうした人が暮らしている「地域」である、と具体的に考えることが重要であると感じていったと言える。さらに2014年度は白梅学園と同じような活動をしている他大学の様子を知り、一緒に考えたいと3つの大学に参加を依頼し、大学で「子育て広場」を開催することの意義を改めて考えることができた。このように学生と、地域の人との交流の質が変わったことは大きな成果といえよう。

3. 白梅学園大学と地域のつながり

これまで述べたように、7つの広場が異なる目的をもち多様な対象に行ってきたため、地域への「出張広場」や小学校での「学習支援」など白梅学園の外で活動することも多い。加えて、この10年活動を継続する中で、白梅子育て広場で出会った「〇〇さん」の紹介などで、白梅学園の外にも学生の活動の場や関心が広がっている。

表2 学外で実施した「子育て広場」の活動

年度	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
国・小平市の動き					次世代育成後期行動計画	東日本大震災小川町1丁目児童館開館				子ども・子育て支援新制度
学内の動き	特色GP採択 子ども学部 子ども学科2年目		特色GP補助終了 世代間交流コーディネーター養成開始	子ども学部 発達臨床学科 開設	子ども学部 家族地域支援学科 開設	LNK結成 *1小平西ネット 準備会	小平西ネット 発足			
学内で実施した広場における 地域とのつながり		紙芝居サークルともしび				特養敬愛ホーム	第二こたま やまびこ 公民館 シルバー大学			
学習支援ボランティア			小平第六小学校 小平第十二小学校							
学童保育			小平第一小学校							
ゆうやけ子どもクラブ あすなろクラブ					あすなろクラブ					
*3 ANTARU FESTIVAL Live for GANA										
出張あそぼうかい			小川東町地域センター 中島地域センター			小川町二丁目 児童館				
障害者福祉センター祭							小平JAM きつず祭		上宿公民館 上宿保育園	
*4 ルネ小平夏休みフェスタ										
小平一小納涼祭										
福島と小平の子どもたちの会 ふくしまきつずプロジェクト										

*1 小平西地区地域ネットワーク

*2 1994年、第一回「障害者の日の集いこげらコンサート」で結成された合唱団。障害の有無や年齢を問わず、歌うことが好きな仲間が集まっている。

*3 広場参加保護者の紹介で参加。ガーナ人オランドさんを中心に音楽を通して異文化交流を楽しむイベント。ガーナに保育園を作るためのチャリティイベントの年もあり

*4 NPO法人子育て広場きらの奥野さんから依頼。

表2は主として「白梅学園外」で実施してきた子育て広場やGP学生委員会の活動である。それまでの先輩たちの活動を継続するだけでなく、学内での広場で関係のできた方たちから学生が直接お誘いを受けて始まったもの、また白梅で子育て広場の活動をしていることを知り、協力の依頼があったものと様々である。その年の学生の状況により、すべてが継続できているわけではないが、活動の場は着実に広がっている。

また2012年には白梅学園が中心となり「小平

西地区地域ネットワーク」が発足した。小平市の西地域のNPO、ボランティア団体、学校、児童・民生委員グループ、町内会、大学関係者、行政側代表などの方々が「お互いの顔が見える地域づくり」、「生活している地域の絆（きずな）づくり」をめざし、個々の団体のイベント、お祭り、防災訓練などのさまざまな活動の交流を行っている。このネットワークには子育て広場でつながりのできた方たちも多く参加しており、学生たちも「コミュニティサロン」に参加するなど、すでにつ

ながりができている。今後の子育て広場の活動の場として位置づけ、さらに具体的な地域とのつながりを深めていくことが大切になるろう。

Ⅲ. 在学生対象調査

1. 調査目的

白梅学園大学・短期大学在籍生を対象に、広場を知っているか、参加したことがあるか、参加した場合、どんなことが学べたかなどを明らかにする。

2. 調査方法

白梅学園大学・短期大学の在校生 1216 名（大学 1,014 名、短期大学 202 名、2015 年 5 月 1 日現在）を対象に授業終了後に質問紙を配布した（2015 年 11 月）。回答のあった 613 名（回収率 50.4%：子ども学科 272 名、発達臨床学科 156 名、家族・地域支援学科 42 名、保育科 143 名）を分析対象とした。以下、質問項目に沿ってまとめる。

3. 結果と考察

(1) 白梅子育て広場の認知度について

白梅子育て広場（以下、子育て広場）を知っているかについては、「知っている」597 名（回答者の 97.4%、以下同様）であり、学年、学科等による違いは見られなかった。

(2) 子育て広場への参加状況について

子育て広場の活動への参加の有無（図 2）をみると、合計で「している」46 名（7.5%）、「以前参加したことがある」121 名（19.7%）、「していない」432 名（70.5%）、無回答 14 名（2.3%）であった。これまでに参加したことがある学生は 27.2% となっており、4 人に 1 人以上が子育て広場に参加したことがある。他方、学科の違いをみると、短期大学 1 年において「している」27.6%、同 2 年「以前参加したことがある」41.7%と高かった。

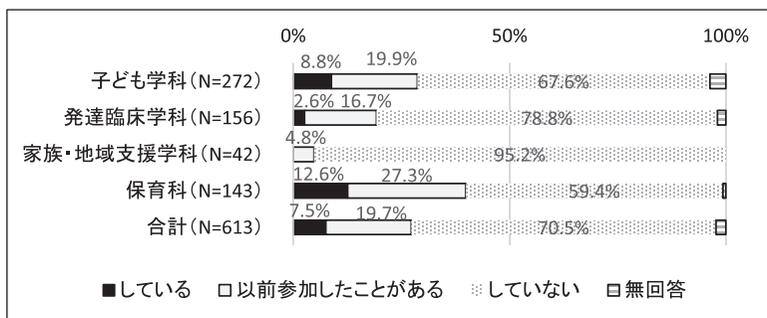


図 2 子育て広場への参加の有無

学生（回答者 167 名）が参加したことがある広場（図 3）をみると、「あそぼうかい」117 名（70.1%）、「紅茶の会」20 名（12.0%）、「ひよこの会」11 名（6.6%）、「きらら in 白梅」70 名（41.9%）、「世代間交流広場」52 名（31.1%）、「子どもの広場」23 名（13.8%）、「気になる子の広場」10 名（6.0%）、「シンポジウム」37 名（22.2%）、「学生委員会企画（Summer Day Camp、しゃぼんだま広場など）」18 名（10.8%）、「その他」3 名（1.8%）であった。また、参加したことがある活動の平均箇所数を学科別に見ると、子ども学

科 1.96（最大 8）、発達臨床学科 2.47（最大 9）、家族・地域支援学科 1.50（最大 2）、保育科 2.30（最大 5）であった。他方、1 つの活動のみに参加した学生の率を見ると、最も低い保育科が 35.1% であり、半数以上の学生が複数の活動に参加している。

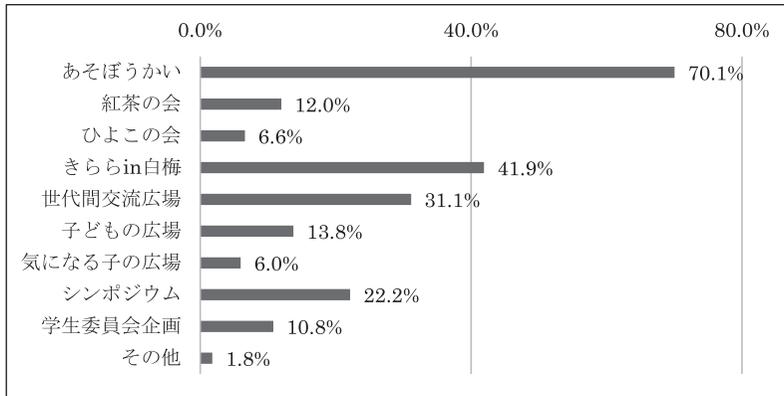


図 3 参加したことのある広場と企画（学生の割合）

また参加したきっかけについては、「自主的に」39名（23.4%）、「授業の一環として」97名（58.1%）、「友達に誘われて」40名（24.0%）、「先生に声をかけられた」4名（2.4%）、「チラシ・ポスターを見て」5名（4.2%）であった。地域子育て支援演習をきっかけとして多くの学生が子育て広場の活動に参加するようになっている。その一方で、「自主的に」あるいは「友達に誘われて」子育て広場に参加している学生もそれぞれ4名に1名となっている。このことから、教員からの呼びかけやポスター等ではなく、授業の一環として、あるいは自主的に参加した学生をきっかけとして友人らが参加しており、学生同士のつながりが波及的に子育て広場への参加の契機となっていることがわかる。

ところで、子育て広場の活動に参加することを通じて学べること（図4）は、「企画力」68名（43.3%）、「運営力」43名（27.4%）、「子

どもとのふれあい方」128名（81.5%）、「親と交流する力」37名（23.6%）、「地域の人と交流する力」41名（26.1%）、「高齢者とふれあう力」31名（19.7%）、「子どもの発達や個人差の理解」43名（27.4%）、「仲間と協力することの大切さ」43名（27.4%）、「他学科・他学年との交流による新たな発想」25名（15.9%）、「子育て支援への理解」39名（24.8%）、「その他」0名であった。他方、1つのみを選択した学生は24名（15.3%）であり、一人当たりの平均選択項目数は3.2であった。そのため、「子どもの発達や個人差の理解」+「企画力」+「運営力」など、子どもへの理解を深めることとともに企画の立案、当日の運営等、複数の学びを得ていることが分かる。また、本学では、子育て広場の活動の一環として世代間交流広場を開催していることから、子どもだけではなく「高齢者とふれあう力」についても実体験を通じて学びとっていることは特色である。

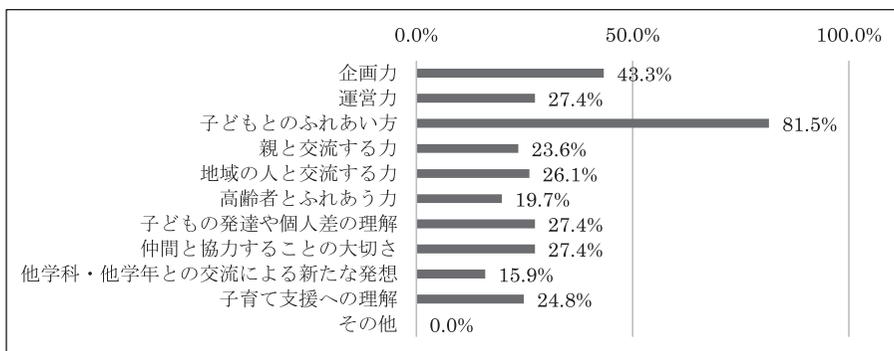


図 4 広場への参加で学べること

(3) 子育て広場へ参加しなかった理由について
 子育て広場に参加していない理由は、「興味がなかった」95名(22.0%)、「参加方法が分からなかった」142名(32.9%)、「時間がなかった」212名(49.1%)、「カリキュラムの予定と重なって参加できない」15名(3.5%)、「その他」19名(4.4%)であった。本学では資格取得を目指す学生が多く、実習関連科目が多く配置されており、またアルバイト等によって「時間がなかった」学生が多くなっているものと思われる。他方、「参加方法が分からなかった」も3割を超えていることから、学生への広報等の改善が必要であろう。

(4) 子育て広場への期待について

今後の子育て広場の活動への期待について、「地域との密接な交流」347名(56.6%)、「他大学との連携」108名(17.6%)、「講義との相互関係」120名(19.6%)、「期待しない」40名(6.5%)、「その他」18名(2.9%)となっている。

(5) 子育て広場についての意見や感想について

子育て広場への意見や感想を自由に記述してもらった。「頑張ってください」等のメッセージがいくつか書かれていたが、その他の記載内容をいくつかの項目に分類し、以下に記す(個人名が記載されている場合等、一部修正)。

《広報について》

- ・以前広場にいた方に声をかけられた。どのような活動をしているのか等を聞かれたが答えられなかった。学校全体がどのようなことを行っているのか知れる何かがあると良いかもしれない。簡潔に説明できると良いのでは？
- ・子育て広場に参加している人は良く頑張っていると思う。
- ・もっと多数の学生をまきこむくらい大所帯になったらいいと思う。
- ・興味あるけど、参加の仕方がよくわかりません(同様の回答複数)。
- ・関わっている学生が積極的に声をかけたり視覚

的な掲示をしたりすれば、入ってみようと思う人が増えると思います。

《学びの内容について》

- ・定期的に開催されている企画に参加し、以前来てくれた子どもと会ったり保護者と関わることででき勉強になります。子育て支援ということで今後も活動が発展し地域の人々への助けになるよう私も協力していきたいと思います。
- ・参加させてもらった時、すごく良い活動をしているなど…子どもだけでなく高齢者なども呼んでやっていることが印象的でした。
- ・どの活動も、学生や地域の人々にとって良い影響を与え、密な関わりがとれてよいと思います。これからの活動にも期待しています。
- ・子育て広場に参加している人たちは本当に子どもが大好きで、真剣に子どものことを考えているのが、授業や実習への取り組みの様子を見ていて伝わり、とても尊敬しています。以前ちらっと見たときに親子共に楽しそうだったので、素敵な活動だと思いました。
- ・参加していた人はとても自分の保育の学びになったと話していました。
- ・学生主体で一から企画をしてみて、大変さや達成感を味わうことが出来た。
- ・子どもにとっても保護者にとっても、息抜き出来たり、楽しめる場所でもあると思うので、安心して過ごすことのできる環境提供を続けてほしい。また子育てに悩んだり、精一杯な保護者のストレスを発散できる場になると良いと思います。

《授業科目として》

- ・もっと授業内での参加を多くしたいと感じました。
- ・短大生が多く、参加への意識が違いすぎて参加しにくかった。学生の数と、参加する子どもの数のバランスがあっていない。
- ・空き時間(授業の間)などどの学年も参加しやすいタイムスケジュールを作りたい。
- ・授業として選択必修になれば、取りやすい。
- ・保育科は忙しくて大変。

《その他》

- ・GP室に入りにくかったです。
- ・白梅ならではの事業なのでいいと思います。
- ・活動をすることはいいことだと思うので、続けてほしい。

IV. 卒業生対象調査

1. 調査目的

白梅学園大学・短期大学で子育て広場に取り組んでいた学生を対象に、卒業後自身の仕事や生活面で、在学中の広場活動の経験がどのように生かされているのかを明らかにする。

2. 調査方法

(1) 調査対象者

白梅学園大学・短期大学の2004年度～2013年度の入学生（2014年度卒業生まで）で、在学中に子育て広場G P学生委員会や特論の広場に参加していた240名に質問紙を郵送した（2015年

11月）。回答があった41名を対象とする（回収率は17%）。回答者の所属は大学（子ども学科18名、発達臨床学科1名、家族・地域支援学科2名）、短大（保育科19名、福祉援助学科1名）であった。

(2) 質問項目

質問紙調査の項目の構成は、まず学科と入学年次をたずね、(1) 在学中に子育て広場に参加して学んだこと（選択肢から3つ選択）、(2) 子育て広場での経験が卒業後の「仕事」に生かされているか、卒業後の「生活」に生かされているかを5段階評価し、その理由を自由記述、(3) 子育て広場に参加してよかったと思うかを5段階評価、(4) 子育て広場を振り返って今感じていることについて自由記述である。

3. 結果と考察

(1) 在学中に子育て広場に参加して学んだこと
図5に示す14個の選択肢から3つ選んで回答してもらった。「子どもとのかかわり方」と「仲

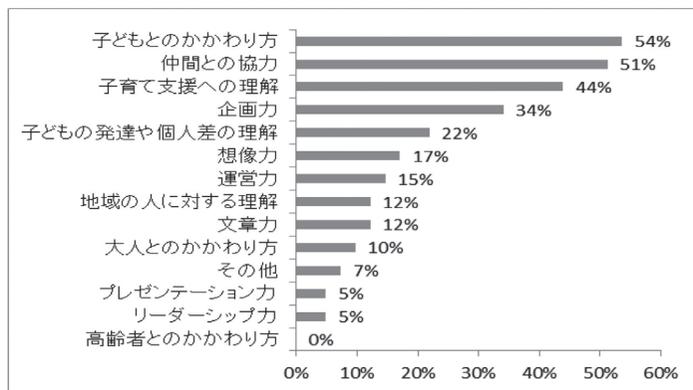


図5 在学中に子育て広場に参加して学んだこと

間との協力」は半数以上の人を選択していた。次いで「子育て支援への理解」「企画力」「子どもの発達や個人差の理解」だった。その他は、環境設定が2名、他1名であった。

(2) 子育て広場での経験が卒業後の「仕事」と「生活」に生かされているか

5段階評価（ア. とても生かされていかにされている～オ. 全く生かされていない）から1つ選択してもらった。結果を図6に示す。仕事で生かされていると回答したのは、約70%（29名）であった。一方「生活」で生かされていると回答したのは、仕事より少ない約60%（23名）であった。

(2) - 1 どんな点で仕事に生かされているか

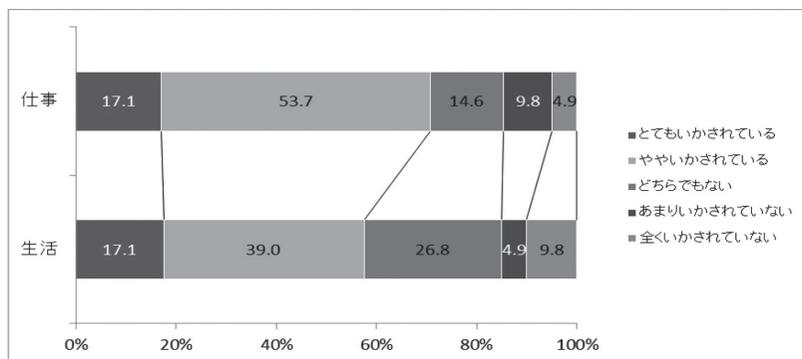


図 6 子育て広場での経験が卒業後の「仕事」と「生活」に生かされているか

仕事に生かされている（上記ア・イ）と回答した 29 名すべてが記述していた。記述内容をまとめると、広場の経験が、①職場での子どもと関わる技術的なスキルとして生きている、②親子とのコミュニケーションに生きている、③職場でのコミュニケーションに生きている、④職場での企画力などに生きているという 4 点に大きく分けられた。具体例を挙げながら、以下それぞれについて説明する。

①職場での技術的なスキルとしては、広場で実際にやったこと（装飾、手遊び、パネルシアターなど）が、就職した保育園や幼稚園、放課後デイサービスなどで生かされているという回答がみられた。白梅学園大学・短大の卒業生の多くが、保育現場や子育て支援現場に就職しており、そのような卒業生にとって、広場での経験が直結して仕事に生かされていることがわかる。

- ・乳児コーナーを主として行ってきたため、乳児の発達、遊具、乳児を連れている保護者への配慮など、乳児クラスの担任をしていて考え動く事ができます。
- ・パネルシアターや紙芝居を大勢の前で演じることに慣れていたことで現場でもためらうことなくできた。

②親子とのコミュニケーションに生きているについても、①と同様に保育や教育の現場に就職し

た卒業生の回答に多く見られた。個別の対応だけでなく、親の不安を聞くことやクラス運営に生きているという回答も見られた。具体的な記述は以下である。

- ・親子へのかかわり方を含め、どのような働きかけを期待し、求められているのかを実体験と共に学べたことで、子育てへのアドバイスをするヒントにつながったり、保育する中でのアイデアを練る際に参考になった。
- ・小学校で特別支援学級を担当している。児童への関わりは、発達段階に開きがある為、幼児とのかかわりに近い対応をする際に行かされることがある。また育てにくさのある子どもを育てている保護者と寄り添う際に生かされていると思う。

③職場でのコミュニケーションに生きているのは、子育て広場の活動を通して目標に向かって仲間と協力した経験が、現在の仕事でチームを組んで仕事をする上で生かされているという回答が見られた。

- ・仕事上、学年、学校というチームを組んで仕事をするので、仲間と協力することの大切さを今も実感しながら仕事をしている。
- ・学校は一つの組織として、児童・生徒の教育活動を行っている。そのため、教職員同士の協力が欠かせない。学生時代に広場を経験して得たチームワークや成功体験は、私の教員生活の基

礎の考えに大きな影響を与えていると思う。

④職場での企画力などに生きているについては、アイデアを出すだけでなく、事前準備や段取りを考えること、記録や文章能力プレゼンテーション力に生かされているという回答も見られた。回答してくれた卒業生の多くが、在学中に広場やシンポジウムなど委員として熱心に取り組んでおり、そのために組織の一員として活動に取り組み、自ら運営していく上で必要な経験を多く積んでいたことが、就職後の仕事に生かされていると考えられる。

- ・企画をする上での準備の段取り等を子育て広場で何度か経験していたので、行事の企画の際の段取りがスムーズにできたことです。行事の際の会議の進行も戸惑わずに行えました。記録を取る事をしていたので、会議での記録がスムーズに取れます。
- ・会議でのプレゼンテーション、研究発表会での発表の仕方などで、シンポジウムなどの学生時代に経験できたことは大きい。

どちらでもないおよび仕事に生かされていない(上記ウ、エ、オ)と回答した12名のうち、記述がみられた11名の記述をまとめると、「現在違う仕事をしている(3名)」、「職場での状況(余裕がない、年齢的に下、子育て支援に関わる機会がない)によるため(3名)」という回答がみられた。また在学中に「参加が少なかった、主体的ではなかった(2名)」という回答もあった。さらに「学びのきっかけにはなった」「考え方には影響している」と直接的に仕事ではないが生かされているという回答も見られた。

(2) - 2 どんな点で生活に生かされているか
生活に生かされていると回答した23名すべてが記述していた。仕事に生かされているとは異なる特徴的な回答内容としては、「地域の子育て活動への興味・関心が高まった」という点が挙げら

れる。妊娠中あるいは子育て中の卒業生は、自分の子どもの子育てをする上で、子育てはまだの卒業生も子どもや地域に関わる意識に、広場の経験が反映されていると思われる。

- ・子どもが生まれ、地域のこうした活動の情報を知りたいと思うようになったのは、この経験があったから。
- ・地域の子育てインフラとか、地域の子育て広場に関心を持って生活をしています。自分はまだ子どもはいませんが、もし子供ができれば、地域の広場やイベントに連れて行きたいと考えたり、いろんな育児関係の報道や自治体の施策にもアンテナが立つ様になりました。
- ・「人と人のつながり」の大切さについて活動の中で学び実感できたことで、微々たるものであるが近所の人への挨拶をするようになった(それまでは少なかった)。

また大学時代の仲間とのかかわりやつながりが自分自身の生活を充実させてくれているという回答も見られた。

- ・卒業後も子育て広場で出会った仲間と集まったりと充実した生活に生かされていると思います。

加えて仕事に生きたことと共通するスキルが、趣味や生活に生きているという回答も多く見られた。

- ・趣味で現在和太鼓をやっていて、自分たちの発表会に向けて運営・企画、チラシ・チケット・パンフレットのデザインからの作成を、仲間とともに意見をぶつけながら1つのものを作り上げようと力を合わせてやっているところです。

どちらでもないおよび生活に生かされていないと回答した17名のうち7名の記述があり、普段の生活では、子育てをしていなかったり子どもと関わる機会が少ないため、スキルを生かしたり、実感したりすることが少ないという回答であった。

(3) 子育て広場に参加してよかったと思うか

とても良かった～全く思わない、の5段階評価で回答してもらったところ、とてもよかったが63%、やや良かったが34%で、回答者の97%がよかったと感じていることが明らかになった。今回の調査の回収率が17%であり、在学中に広場活動に特に熱心に取り組んでいた卒業生の回答が多くを占めていると考えられるが、広場活動に参加することの意義をその大半が感じていることが明らかになった

(4) 子育て広場を振り返って今感じていること

33名の記述があった。大変だったが非常にやりがいのある活動であったこと、仲間との協力、今後の活動へ期待が語られていた。

- ・たくさんグチを言い合ったり、高い志を伝え合ったりしながら、切磋琢磨した仲間たちは、今でも大切だと考えています。あの頃の自分たちの心の中にあった根拠のない自信と勢いは、何かを創り上げていくときに必要な力だと思います。
- ・仲間と時には意見をぶつけ合いながら行う経験は大切だと思います。社会に出ると、なかなか自分の意見を言えない場面も多くなると思うので、学生の時に自分のことをしっかりと伝える力をつけておく事は大切な事だと思います。
- ・就職し、ある程度落ち着いてきたこともあり、支援の必要性というものをとても強く感じるようになりました。時代の流れと共にニーズも大きく変化を求められるからこそ、そこに応えることはもちろん、両者にとってより良い影響を与えられる環境をつくっていかれたらと思います。これから活躍する方たちにとってもこの先の道しるべとなる影響があることを願っています。
- ・地域の関係が失われると言われて久しいですが、それを小平では、白梅の学生がそのエネルギーで地域の子育て支援をサポートしようと必死に奮闘している。白梅学園という私立大学のイメージアップにも大きな影響を与えていると

思います。

V. 教職員対象調査

1. 調査目的

子育て広場10周年のまとめを行うにあたって、学園内部の教職員はどのようにとらえているのかそれを明らかにするとともに、学園としてまた大学として「子育て広場」がどの程度認知されていたのかを確認することを目的とした。合わせて、どのような要望を持っているのかをつかむことを目的とした。

2. 調査方法

卒業生や地域、あるいは現役学生への質問紙調査と併行して実施し、立体的な調査のまとめとすることがねらいにあるので、調査項目も比較が可能なもの、そして幼稚園から大学まで同じ項目で尋ねるという事を基本とした。

高校、中高一貫校、幼稚園、そして職員は職場ごとに調査を依頼し、後日回収した。ただし、事務職については部署ごとに教員と一緒に依頼し、集計の時に調整することにした。大学についてはレターケースを通じて配布し、集計箱を教務課に置いた(2015年11月)。

3. 結果と考察

白梅学園の2015年度専任教職員総数は157人で大学の長期研修と産休を除くと155人、質問紙回答者が78人で、回収率は50.3%と過半数の方に回答を頂いた。以下項目と校種ごとに考察する。

(1)「白梅子育て広場」は学園全体での理解や参加が弱い

10年間の活動を通して、学園内の理解を深めることができたことは確かであり、80%以上の方が参加や認知をしている(表3)。しかし一方では同じ学園内でありながら「全く知らない」と回答した数が20%近くにも上り、改めて広報などの在り方を検討しなければならないと考えられる。また大学も含めて「参加したことがある」と

いう回答は1割強であり、もっと多くの教職員に参加を依頼する必要がある。

(2) 「子育て広場」は白梅学園にとって大き

表3 子育て広場の参加の有無・認知度

	事務	幼稚園	一貫校	高校	大短	合計 (%)
ア. 参加したことがある	1	2	0	1	6	10 (12.9)
イ. 活動を見たことがある	9	3	3	11	10	36 (46.1)
ウ. 名前を聞いたことがある	1	3	5	8	0	17 (21.8)
エ. 全く知らない	0	1	12	12	0	15 (19.2)

な意味があったと考えている

表4をみると、「大いに意味があった」と「まあまあ意味があった」を合わせると94.5%もの教職員が「子育て広場」の学園にとっての意義を確認していることは、この10年間の取組みの成果として考えられる。特に大学と短期大学ではほとんどの回答者が「大いに意味があった」と評価している。その理由の記述の中で、学生の成長に

絡めての発言が多くなっており、「子育て支援」という視点だけでなく「学生の学び」ということが理解されている結果であると判断できる。なお、広報としての「子育て広場」も大きな意味のある事を、学園の教職員全体として受け止めていることも読み取れた。

<ア・イの理由>

表4 子育て広場の活動の学園にとっての意義

	事務	幼稚園	一貫校	高校	大短	合計 (%)
ア. 大いに意味があった	1	2	0	4	13	20 (36.4)
イ. まあまあ意味があった	9	6	5	10	2	32 (58.1)
ウ. あまり意味がなかった	1	0	1	0	1	3 (5.5)
エ. 意味がなかった	0	0	0	0	0	0 (0)

① 学生の成長の視点から

- ・学生たちが自主的に活動する機会が少ないが、この活動は企画、運営など自分たちで保育に関わる生きた学びを形作っていると思う(いろいろ不備はあるにしても)。
- ・学生にとっては実際に子どもたちに接して活動する機会になっている。

② 地域連携・貢献の視点から

- ・定期的に積み上げてきたことが地域にも伝わってきている部分があると思われる。そこに行けば広場があること、大学内にある事、学生さんたちなどもいることなどは保護者や地域の方々にとっても有意義なのではないか。

③ 募集の視点から

- ・「子育て広場」を理由に白梅を志望してきた高

校生が大勢いた。地域に白梅の存在とその特徴を知らしめた。学生に主体的に活動できる場、地域の人たちにそして喜んでいただける場と機会を提供した。

- ・地域に白梅学園を知って頂き、子育て広場にいらした方々が、白梅幼稚園、清修中高一貫部、白梅学園高校を知ることになることと、地域に開かれた白梅学園として大いに意義があると思う。

(3) 「子育て広場」が地域にとって意味があったと考えている

表5をみると「子育て広場」の存在を意識している教職員は何らかの意味を感じ取っている。いくつかの課題も提示されているが、基本的には「子

育て広場」の10年間は地域に対して何らかの意味があることを学園全体として確認しているとい

うことになる。

<ア・イの「意味があった」理由>

表5 子育て広場活動の地域にとっての意義

	事務	幼稚園	一貫校	高校	大短	合計 (%)
ア. 大いに意味があった	7	4	0	4	6	21 (38.2)
イ. まあまあ意味があった	3	4	6	12	6	31 (56.3)
ウ. あまり意味がなかった	1	0	0	0	2	3 (5.5)
エ. 意味がなかった	0	0	0	0	0	0 (0)

- ・地域のお母さんたちにとって定着して参加していることを感じる。
- ・地域の方々、子どもたちと限られているとはいえ、交流の場を大学が提供し、共に活動し、交流集会を開いていることは、小さい働きかけかもしれないが貴重だと思う。
- ・地域で子どもたちを育てるという意識も育ち、母親のよりどころにもなったと思います。
- ・やはり「大学がやっている」という安心感から、信頼に足る場があるのは地域の子育て中の家族にとって大きいように思う。
- ・子育てで支援や色々な方の交流の場になっていると思うので。
- ・小さな子どもを抱えた子育て中の方々にとって、広場の取組みは信頼して参加できる場に

なっていたと感じている。NPO 法人とのつながりなど、一緒に取り組める機会になっていた。

(4) これからの「子育て広場」は発展的に継続すべきである

今後の「子育て広場」の在り方について(表6)は、基本的には今までの取り組みを継続すべきであるという回答であるが、大学や学園全体として取り組むことを希望する声もある。現在「子育て広場」はサークルとは違って、大学の協力の下に予算を確保し、学生が主体ながらも地域との繋がりが進んでいるということになるが、大学や学園レベルでの明確な指針はできていないので今後の課題であろう。

<イ・ウ理由>

表6 今後の「子育て広場」のあり方について

	事務	幼稚園	一貫校	高校	大短	合計 (%)
ア. 今まで通りでよい	2	5	0	12	6	25 (53.4)
イ. 多少手直しをする	9	2	6	2	6	9 (42.3)
ウ. 大幅に手直しをする	0	0	0	0	2	2 (4.3)
エ. 必要が無いのでやめる	0	0	0	0	0	0 (0)

- ・地域の人々が、自由に学内に入ってきて、学園と一体になって地域を変えていく方向性が望ましい。但し、地域の様々な「しがらみ」をどう乗り越えるか、政治的、宗教的影響、犯罪に利用されないよう、核となる人々の団結が鍵である。
- ・もっと学園が積極的にバックアップするべきだと思う。場所、予算の提供、支援する人の確保、

その他。

- ・NPO 法人等、独立した組織で展開し、地域に貢献するか、大学教育の一環として明確に位置づけ、演習・実習とリンクさせていく。
- ・もう少し、幼稚園でいえば学生さんが1年を通して親子に接する中で、計画を建て、成長する姿を実感できると、今後社会に出た時も役立つし、幼稚園、学園も地域にもっとこまかくつな

がるように思います。

(5) 学園として地域との連携は強化すべきである「今後白梅学園として地域との連携をどのように行っていくべきか」という質問に対して記述式で答えてもらった。学生の位置づけについては、もっと主体的に取り組むことによって地域との連携が進むという期待もあり、今までの積み重ねが評価されていると思われる。地域のセンターや情報発信基点としての「子育て広場」についても、あらためて学園として地域と向き合うシステムづくりが期待されていると思われる。学園全体として取り組む視点では、中学校や高校なども含めた参加への意志表示もあり、今後の全学の取り組みの視点として配慮しなければならない。

① 学生の位置づけについて

- ・学生が専門性を活かして地域を活性化していく活動。学生がコーディネート力、ネットワーク力をつけつつ、地域に貢献していく活動。
- ・この地域の状況について学生が改めて学ぶということが重要な時期なのかもしれない。
- ・全学的に協力していくための参加の方法（部分参加、一時的参加など）をわかりやすくして、ゼミなどの持つ力を活用できるようにする。
- ・地域との連携は大切だと感じるので“学生と地域との触れ合い”をテーマにした活動をこれからも行ってほしいです。
- ・地域を引っ張って行く力をつける事。そしてその力を発揮すること。
- ・今後も社会貢献できるよう、学内のみならず学外でも活動して行けたらと思います。（地域のイベント参加など）また学生の活躍を情報発信してほしいと思います。

② 地域のセンターや情報発信の基点として

- ・子どもの活動のできるマップを逐次更新して、常に情報発信できるようになる。また、子どもの活動できる場を改善、環境整備ボランティア活動もできるのではないかな。
- ・学園として財政面、施設面、最大限の援助をす

べき。

- ・広場や西ネットなど、小さくても多様な形で接触を図っていくのが良いと思う。継続することの意味が大きいのではないかな。
- ・学生が外に出ていく機会を単位化するなど活動を支援できるとよい。
- ・地域センターとの連携を緊密にして、学生たちがその中でも自発的な企画をだし、実践して行けば、対象とする年齢層も広がり、充実すると思われる。
- ・白梅のホームページでは自治体などの協力も得てとあります。協力の方向が団体・自治体⇒学校・学生への一方通行ではなく、双方向になることが理想的だと思います。
- ・家ではできない事、同年齢の人たちとやれること（子どもが）の中で、我が子について親も少し離れた中で発見することもあるかもしれませんね。働いている人も増加する中、時間、曜日の設定などの工夫、父親の参加を考える（どのようなペースで集まり企画の話し合いがなされているか）が、学生、職員、NPO 団体の方、民生児童委員など、色々な顔とつきあわせて話す機会を宣伝してもっと密接な関係ができるとう良いと思ったりします。

③ 学園全体として取り組む

- ・中高一貫部の生徒もボランティアなどで関わりが持てれば後々地域との繋がりが広がるかもしれないので、そのような機会があれば幸いです。
- ・共通して楽しめるイベントなどの開催。プチカルチャーセンターなどでの交流。
- ・ボランティアを通して、また大学の先生方等の講演会、研修会などを通して。
- ・イベントを通じての交流。地域イベントへの参加だけでなく、学校のイベントに地域の方々にも来てもらう、というのは大切なことだと思います。
- ・清掃活動等のボランティア活動を、中高一貫部、白梅高校、短大、大学ごとに定例化（年に1～2回ずつ）行っていくべきかと思われます。

- ・学園内だけでなく学園外もボランティア活動の一つとして取り組んでほしい。
- ・地域の方と一緒に、秋であれば落ち葉拾いなど、普段利用している通学路を綺麗にしていく活動をすると良いと思います。
- ・学生はもちろんのこと高校にも「保育教育系クラス」があるので、何らかの形で関わらせていただきたい。
- ・地域との関係が希薄になっている現代社会で、“子育て広場”のような活動は必要であると思います。通学路でのトラブルだけでなく、学校と地域との様々な問題が取り上げられますが、これからの社会を担っていく子ども達とともに応援し見守り一緒に育てていくという意識をみんなが共有できるような環境作りができたらいいます。きっと昔は自然とあった事なのでしょうが…。若者がお年寄りから学ぶこと（知恵）も、逆の学びも、互いに認め、共感して行けると良いのに。
- ・大短、高、中、幼がそれぞれで行う事も必要ですが、白梅学園としてみんなで行事を行うのはいかがですか。学生には生徒や園児の先輩として指導をお願いします。教員も職員も巻き込んでください。
- ・大学での活動の様子がもっとわかるように、幼稚園の掲示板に貼らせてもらう等、活動そのものをもっと知ってもらい必要があるのではないのでしょうか。そうすれば、保護者から地域の方への広がると思います。大学での活動が後輩にもつながるよう、高校にも様子を伝えて頂けると嬉しいです。大学生と高校生の交流の場があっても良いのでは。

4. 考察

「子育て広場」の活動に日常的に触れる可能性のあった教職員への質問紙は、活動している学生たちへの評価や励ましと同時に、さらに改善を求める声も含まれていた。10年の重みを感じつつも、未来志向での意見が寄せられ、これからの在り方

を考える上で大いに参考となるであろう。調査から見てきたことを3点にわたって述べたい。

第一に、大学に高校や中学校、あるいは幼稚園が併設されている学園として、それぞれの部署において、大学生が行っていることに対して大いに期待や関心を持っているということである。当たり前かもしれないが、多くの学園に置いてそうした関係が難しくなっており、10年の歩みを通して縦につながってきていると言える。

第二に、学園全体が地域とのかかわりを重視し、「子育て広場」が一定の役割を果たしているということを認識しているということである。「地域連携」と言いながら具体的に何を行ったらいかががなかなか見えない中で、確実に地域につながり、学園としてのつながりを広げていることを理解してきていると言える。

第三に、とは言っても「子育て広場」がどのような事をやっているのか、あまり理解されていない状況があり、学園全体としてもっと理解を深めるような手立てが必要であるということが見えてきた。

今回の調査では、「子育て広場」が地域との関係で意味があることと認識している反面、それを学生だけに任せていいのかというメッセージも送られてきている。あらためて学園として、まだ大学として「地域連携」を考えさせられた調査であった。

VI. 地域対象調査

1. 調査目的

白梅学園大学・短期大学（以下、大学）の周辺地域にお住まいで、小平西地区地域ネットワークの案内を送付している個人の方を対象に、白梅子育て広場に対してどのような認識を持っているのかを、質問紙調査によって明らかにする。

2. 調査方法

(1) 調査対象者

大学の周辺地域にお住まいで、小平西地区地域ネットワークの案内を送付している140名に、

質問紙を郵送した（2015年11月）。回答のあった43名（回収率30.7%）を対象とする。

（2）質問項目

質問紙調査の項目は、①白梅子育て広場の存在を知っているかについて（選択肢から1つ選択）尋ねた。次に「よく知っている」、「まあまあ知っている」と回答した人に、②白梅子育て広場を知るルートについて尋ねた。次に、全員に、③学生が中心となり大学が支援する取り組みについて、地域の視点からどのように見えるか（選択肢から1つ選択）を尋ねた。さらに、④今後大学が地域に対して何かを行うとしたら、どんなことが必要か、⑤学生が地域に対して何かを行うとしたら、どんな点に留意すべきかについては、自由記述で回答してもらった。

3. 結果と考察

（1）白梅子育て広場の存在を知っているかについて

図7に示す選択肢からの回答では、43名中よく知っているは7名（16%）、まあまあ知っているは21名（49%）、あまり知らないが9名（21%）、全く知らないが6名（14%）であった。回答者の3割以上が知らないという回答であることは、回収率などから鑑みると、より一層のPRの必要性が検討されると思われる。

（2）白梅子育て広場を知る方法について

次に、「よく知っている」もしくは「まあまあ知っている」と回答した27名を対象に、白梅子育て広場を知るルートについて尋ねると、図8の通り、ポスター・チラシが16名、学園HPをみて3名、学生と一緒に活動したが2名、その他の回答では、知人や関係者から3名、西ネットが2名、民生児童委員の活動から1名、学生の名刺に「子育て広場」の記載があったが1名、孫が白梅幼稚園に通っているが1名であった。この結果、全体の6割がポスターやチラシであり、ま

た、学生による宣伝活動などが見受けられることから、学生による多様な働きかけが少なからず子育て広場を知る契機になっていると考えられる。

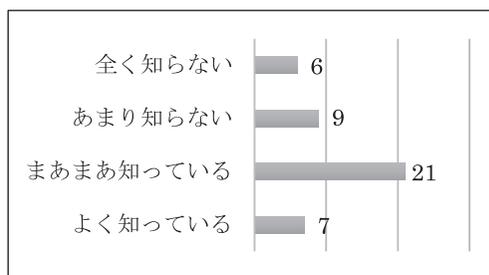


図7 白梅子育て広場の認知度 (N=43)

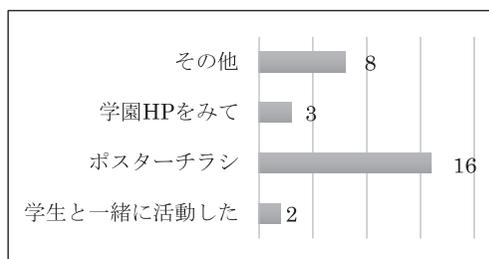


図8 子育て広場を知る方法 (N=27)

（3）学生が中心となり大学が支援する取り組みに対する地域の見方について

白梅子育て広場の取り組みを地域の方がどのように見ているかについては、43名中とても良いが24名（55.8%）、良いが18名（41.8%）、良いことだが問題ありが1名（2.4%）、であった。問題ありの回答では、1)での回答が「あまり知らない」であり自由記述では、常識のある学生が大学の外で活動することで大学が知られるのではないかという意見であった。大学の中に来てもらうだけではなく、大学の外に学生が出ることも期待されている面が後述の自由記述からもうかがえ、学生が地域に出向いて行くことも検討課題であると考えられる。

（4）自由記述形式の回答について

自由記述においては、記された内容を幾つかの項目に分類し、それらを表にまとめる作業を行った。以下、その内容から見てきた事柄について

報告する。

1)「今後大学が地域に対して何かを行うとしたら、どんなことが必要か」についての自由記述の内容は、3つの項目（子育て広場の活動に対して、学生の地域活動に対して、大学と地域との関係に対して）に分類した。次に3つの項目に分けた記述を、さらに8つの項目に分類した。主旨を変えない範囲で文体等を修正し一覧にまとめたものが表1である。

子育て広場の活動に対しては、①子育て広場の活動をもっとPRする必要がある、②活動内容の充実・掘り下げ、③大学の近くを中心とした小地域に根ざした活動、④学問的・発展的深まりの4つに分類した。子育て広場の活動は、大学周辺地域を活動の範囲とし、活動枠を拡げるよりも内容を深め掘り下げ、さらには実践的にも学問的にも質の高いものに発展していくことへの期待が、記述からは窺える。

学生が行う地域活動に対しては、①学生が地域の人と関わる、②大学による学生への支援・指導に分類した。学生自身が地域の活動に積極的に関わり視野を広げていくためには、大学としても学生が責任感と自覚を持って地域に出られるための支援や指導、環境整備を行っていくことの必要性が記述から読み取ることができた。

大学と地域との関係に対しては、①大学への期待、②行政・地域との連携に分けられた。大学に対しては、子どもだけではなく多世代との交流などを通して大学と地域が結びつけばという期待がある一方で、地域に開かれた大学といっても地域はそれほど期待していたいと記述もあった。また、行政・地域との連携では、学内だけではなくアウトリーチ的な活動など、多様な資源と関わるのが、大学にとっても学生にとっても利があり地域貢献に繋がるという記述もあった。地域で暮らす人々たちにとっては、大学が地域に対して行う活動が自身の生活や地域生活にどれだけのメリットがあるのかが重要になると考える。お互いの

マッチングが必要な時期に来ているという指摘もあり、地域との対話の必要性が求められていると言えるのではないだろうか。

2)「学生が地域に対して何かを行うとしたら、どんな点に留意すべきか」については、自由記述の内容を整理し、3つの項目（学生に期待すること、学生が留意すること、大学が留意すること）に分類した。次に3つの項目に分けた記述をさらに7つの項目に分類した。それらを一覧にしたものが表2である。

学生に期待するでは、①地域に出て見聞を広める、②卒業後も活動内容が繋がる、③地域課題を知るに分類した。学生が積極的に地域に出て住民と話しをすることを通して見聞を深め、その中から地域課題を知ってもらいたい。また、学生が卒業しても活動内容が次に引き継がれることが、学生への期待としてあげられた。「Link」という白梅子育て広場の卒業生の会がある。先輩達は子育て広場の開催日には大学に訪れることも多く、後方でアドバイスもしてくれている。活動内容の継承とともに地域課題の継承、そこから地域ニーズに即した新たな活動や方法が見だしていくことも、これからの課題ではないだろうか。

学生が留意すべきことでは、①個人情報の保護、②マナー・態度・姿勢に分類した。活動を通して知り得た情報を口外しないことは当然のことであるが、ブログやSNSなどによって人と人との情報が広まる世の中であるため、より一層の注意喚起が求められる。また、人と接する上では、時間を守る、約束事を守る、言葉づかいなどは、学生1人ひとりの自覚も求められる課題であると考える。

大学が留意すべきことでは、①学生が地域で活躍するための支援や教育指導、②学生による地域活動へのビジョンの可視化に分類した。上記の学生が留意すべきことにも関連するが、学生が地域活動を行い活躍するためには、社会人としてのマナーを大学としても教育指導を丁寧に行っていく

必要がある。こうした指摘は、これまでの学生との関わりのなかで、何らかの不適切な言動や態度があったことが予測される。地域との信頼関係の構築のためにも、大学としても一層の努力が求められる。また、学生が安心して地域活動ができるために保険等の充実と共に、学生が地域活動を行うビジョンを可視化できるように留意し、これからの活動を検討する必要があるだろう。

10年の節目としての地域質問紙調査は、地域からの声をきく重要な契機にもなった。地域からの声に耳を傾け呼应していくことが、当面の課題ではないだろうか。

4. まとめにかえて

質問紙による地域の方々の回答は、温かくかつ好意的であったと思われる。一方、学生が中心となり大学が支援するという取り組みにおいて、学生の主体性を大切にしながらも、他者との関係におけるマナーや個人情報に対する配慮等、留意すべき重要なお指摘を数多く頂戴した。その内容は、社会人として巣立つ学生に対する教員並びに大学の教育・指導体制にも関わる事柄でもあり、貴重なご意見に私たちとしても身の引き締まる思いで受け止めている。また、活動の継続は力であるが、変化をしていく地域の実情やニーズの把握、地域資源の掘り起こしと連携など、地域に暮らす人たちの地域課題とどのように向き合っているかが、これからの重要な課題であろう。子育て広場の活動を地域からもサポートしていただき、暮らしやすい地域社会、みんなの居場所を共につくって行きたいと願う。

Ⅶ. 全体的考察

学生が地域のニーズに応え主体的に取り組む活動の先駆けとして「セツルメント活動」がある。1923年の関東大震災後、東京帝国大学学生の救護活動がもととなった東京帝国大学セツルメントは1938年に閉鎖されるが、1950年東京大学学生セツルメントとして再結成される。この他1947

年「京都少年保護学生連盟」によるBBS (Big Brothers and Big Sisters) 運動や1952年に愛媛県が実施したボランティア講習会が元となり始まったVYS (Voluntary Youth Social Worker) 運動など、学生や青年を中心にボランティア活動が行われるようになり、現在では教育系・社会福祉系の大学や学生を中心に、子ども会やセツルメントなど多様な活動が展開している。これらの活動記録には、1959年の伊勢湾台風による被害後の名古屋における「ヤジエ・セツルメント保育所」の実践記録(河本・原田、2009)、1952年から1991年にわたる東京都文京区での氷川下セツルメントの実践記録(氷川下セツルメント史編纂委員会、2014)などがある。時代の変化に伴ってセツルメント運動も変化しているが、記録からは、学生自らが地域のニーズを掘り起こし、地域における地道な日常的活動をしつつ、そこから「学ぶ」ことを基本にしていること、その結果「参加した学生の多くが、大学で学ぶ理論と地域の中で実践し住民の人たちと語り生活を共にすることで理論と実践が結びつき、地に足ついた学問」とした(河本・原田、2009)ことが読み取れる。この10年の取り組みのなかで学生は、「子育て広場」の活動を通じて、地域の子育て世帯を中心に、常に地域に関心を向け、具体的に「顔の見える関係」を作り、学ぼうとする活動を継続してきたとも言える。以下にまとめるように一定の成果はあるものの、理論と実践を結びつけ地に足ついた学問とするためには、さらに学びの内容を充実させる必要もあると思われる。

また地域福祉という視点からは、「地域社会で支援を求めている者に住民が気づき、住民相互で支援活動を行う等地域住民のつながりを再構築し、支え合う体制を実現するための方策」について検討・提言が行われている(全国社会福祉協議会、2008)。2012年に始まった小平西地区地域ネットワークの取り組みはそうした意味でも重要であり、今後どのように連携を深めていくかが課題となろう。

以下、成果と今後の課題・展望をまとめる。

(1) 10年間の成果

① 総合的な学びの場

今回実施した4つの調査を踏まえると、子育て広場は学生にとって「総合的な学びの場」になっていたと言える。学生自らの声だけでなく、地域の方々、あるいは高校や中学校等の反応からもそのことが伺える。象徴的な言葉として「実習では学べないものがある」という発言がある。実習は教室で学んだ事を体験する場として、学生にとっては大きな学びの場であるが、そこでも学べないものが子育て広場にはある。それは自分の頭で考え、方向を決め、実行をして、その結果を振り返るといった流れである。

② 実践を通しての考える力、感じる力の発展

卒業生の質問紙に多く書かれていたが、「実践を通しての考える力、感じる力の発展」につながったのではないかと考えられる。高校までは自分たちで考えて実践し、その総括をして次につなげていくという体験はほとんどできていないのが実状である。「子育て広場」では、企画内容から宣伝、そして振り返りまで学生自らが考えて準備しており、このことが学びの質を保障しているのではないかと思う。

③ 卒業生等とのつながり

10年の間に広場を体験した学生たちが多数卒業し、広場で学んだ事、築いた人間関係を活かして繋がっていった事も特徴である。初代学生GP委員会代表をはじめ、毎年卒業生が集まる場として広場が位置づき「Link」というサークルを形成している。こうしたつながりは卒業生だけでなく、地域の住民とのつながりもできるようになり、名前で確認し合う関係が広がっている。またLinkの人たちは定期的に集まり交流や研修を行っているが、学生たちにも参加を呼びかけてくれている。なおLinkには大学の教員も参加しているが、かつての指導員さんも参加し適切なアドバイスをしてきている。信頼できる大人との関

係が学生の成長に大きな役割を果たしていると言えよう。

④ 多文化共生の取組み

2009年度から近隣の朝鮮大学校との連携がはじまり、2回の合同広場に朝鮮大学校保育科の学生に参加してもらって、多文化の体験をしたこともこの10年を振り返った時に確認できる成果である。さらに近隣の小学校や中学校、あるいは幼稚園などとの連携で、学生たちが出かけていって交流を行ってきたという成果もある。

⑤ 7つの広場の広がり

子育て広場のスタート時から7つの広場が意識され、そのことが学生たちのまとまりを作る上で難しい状況を生み出しているのではないかという心配もあるが、むしろ7つの広場があることによって学生たちが広い視野で子育て支援などを捉える事ができたことも大きな成果と考えられる。それだけの学生委員会の力があってもと言える。しかし人数が少なくなるとこれを維持するのは大変で、今後の方向として検討しなければならない。

⑥ シンポジウムによる振り返り

広場をスタートしてから2年後、GP学生委員会が活動をはじめてすぐに1年間を振り返った白梅子育て広場シンポジウムが行われた。7つの広場やGP学生委員会の取り組みなどを振り返りながら、課題を明らかにし、次年度への活動へとつなげていく、極めて重要な活動であった。12月実施になってからは入学が決まった高校生たちも参加して、大学生がどれだけ素晴らしい実践を行っているのかを知る機会となってきた。この振り返りを通して、自分たちの活動の意義を確認し、次の年に繋げていくという意味があったことは確かである。各広場の発表と同時に、シンポジウムを行い、その中で子育て広場が大きな役割を果たしていることを地域の参加者の発言によって確認されてきた。

⑦ 子育て広場を授業の中に持ち込む

最後に、子育て広場の幅を広げるという意味で、授業の中に「子育て広場」を持ち込んだこと

が結果として学生の継続と力につながっていると思われる。実際にこの数年の学園祭やシンポジウムにおいて、演習を受講している学生が積極的な役割を果たしていることは確かである。

(2) これからの課題

① 学園全体としての「子育て広場」へ—幼稚園・中学校・高校をつなぐ

白梅子育て広場は出発当初から大学（当時は短期大学）の活動としてスタートした。この10年間、シンポジウム等での高校生の参加はあるが、活動の主体は常に大学生であった。しかし今回の質問紙調査で、中学校や高校の教員から中学生や高校生も参加させてほしいという声が出され、学園として広場を行っていく視点が出されている。白梅学園内部だけでなく、近隣の小平第五中学校、小平第二中学校、小平西高校なども視野に入れながら、まずは学園全体としての「子育て広場」の構築に手をつけなければならない。

② 学生の理論的な学びの場

7つの広場を基本にして学生たちは様々な実践を行い、そのことが学びにつながっていることは確かである。しかしかつて気になる子の広場で子どもの状況について学習会を行ったような学びの場が出来ていないというのが昨今の広場の状況である。子どもの理解、親の理解、地域の理解等いずれのテーマをとっても、新たな学びがないと発展していかない。子どもを取り巻く環境、子どもの発達、高齢者問題などきちんとした学習の場を今後は確保していくことが必要なのではないか。また子どもにとっての遊びの意義や昨今のメディアの問題等も学びの中で深めていかなければならない。

③ 地域との顔の見える結びつきを広げる

地域との結びつきは個別なもので、顔と顔のつながりの中で結びつきが強まっていく。学生は2年あるいは4年たつと地域との繋がりがなくなっていく。そのことを変えることはできないが、限られた期間でどうやって顔と名前を一致させてい

くのか。少なくとも子育て広場の学生は地域で顔と名前が一致する関係を10人程度持つことが「顔の見える」関係になっていく。

④ 他大学との連携をすすめる

昨年のシンポジウムで初めて他大学の学生を呼んで「子育て支援」をテーマにして討論を行った。その後大学同士の交流もはじまり、発表会に学生が招待されるなどということもあった。こうした交流を更に広げて子育て広場の実践を広めてほしいものである。

(3) 未来への展望

① 顔の見える交流と支援の在り方をめぐって

「子育て支援」という場合に、「支援」は外からの援助という意味を持つ。地域、あるいは地域の子どもたちと交流を進めるには「地域の視点」「子どもの視点」が必要である。概して大学というところは地域に対して「貢献」という意識を持っている。しかし顔の見える交流を進めるには「地域の視点」「子どもの視点」が必要である。地域の声や子どもの声に耳を傾け、そこから活動の視点を学んでいくということが本当の意味での交流につながり、結果として「貢献」していくことになる。

② 地域交流研究センターの中で

2016年度より、白梅子育て広場は教育福祉研究センターから地域交流研究センターを窓口にするようになる。つまり地域との関係を作りながら「子育て広場」を実践していくことになる。GP学生委員会の議論の中でも「地域に根ざした」という言葉が出されているが、文字通り地域との交流を前面に掲げて取り組んでいくことができる。

③ 多文化共生の視点を持って

朝鮮大学校には日本国内で過ごす韓国・朝鮮籍の学生が全国から集まっている。そして保育科では朝鮮幼稚園の保育者を養成し、全国に配置される。この朝鮮大学校との連携は様々な困難があるが、それを越えたところに「ヒューマニズム」の精神が位置づく。保育科との交流が学園全体に広

がっていくことを期待したい。また小平市には朝鮮大学の学生を含めて4000人近い外国籍の人々がいる。平均すれば小平市民の50人に一人が外国籍である。こうした人々が積極的に参加できるような企画を考えていくことも今後必要になってくるであろう。

④ 子育て広場の理論化を進める

シンポジウムで総括する中で一定の理論化は行っているが、それをもっと広げて、子育て広場の意義なども含めて理論化をすすめることが今こそ必要である。保育、教育、福祉を含めて課題は山積しており、子育て広場の活動を通して気付いたことは、学びの深さにつながっていく。授業での学びを活かしながら、更に学びの場を重ねていけば、地域を動かすことにもつながっていくであろう。

⑤ 豊かなコミュニケーションを

メディアや文化の発達が、人間の直接のコミュニケーションを奪うことにつながっているという指摘がなされるが、現在の携帯やスマホの氾濫は、こうしたことに拍車をかけている。顔と顔を見合わせながらのコミュニケーションは「子育て広場」の基本である。そのためにも学生同士あるいは学生と教員、地域の大人たちとのコミュニケーションを積み重ねていく必要がある。

注) 本研究で質問紙調査を実施するにあたり、白梅学園大学・短期大学研究倫理審査委員会の審査を受け、個人情報の保護等、倫理的配慮の元を実施した。

謝辞

質問紙にご協力頂いた皆さまに、この場をお借りして感謝申し上げます。今後とも、忌憚のないアドバイスを宜しくお願いいたします。

<引用・参考資料>

- ・河本ふじ江・原田嘉美子 2009 「レンガの子ども」ひとなる書房
- ・経済企画庁 平成12年 平成12年度国民生活

白書ボランティアが深める好縁

- ・子育て広場 GP 委員会 2009 「大学における地域と学生をつなぐ子育て広場」報告書
- ・小平西地区地域ネットワークニュース 2012 小平西のきずな
- ・小松歩・佐久間路子・瀧口優・草野篤子・金田利子・佐々加代子 2008 子育て広場を介し地域と学生を繋ぐ短大教育—学生の変化と教育効果の評価方法について 日本保育学会第61回大会発表論文集
- ・佐久間路子・瀧口優・草野篤子・小松歩 2012 「子育て広場特論」を通しての学生の学びと課題 白梅学園大学・短期大学教育福祉研究センター年報17
- ・白梅子育て広場委員会 2005 2004年度白梅子育て広場報告書
- ・白梅子育て広場 GP 委員会及び企画調整部 2009 「白梅学園大学・白梅学園短期大学子育て広場ハンドブック」
- ・白梅子育て広場10周年記念実行委員会 2016 「『白梅子育て広場』10年の歩み」
- ・全国社会福祉協議会 2008 「地域における「新たな支え合い」を求めて—住民と行政の協働による新しい福祉—」これからの地域福祉のあり方に関する研究会報告
- ・瀧口優・瀧口美智代 2006 「学生が生きる子育て支援」白梅学園大学・短期大学 教育・福祉研究センター年報 No.11.
- ・瀧口優・金田利子 2009 白梅子育て広場における学生の主体的な参画という視点からの考察 日本保育学会第62回大会発表論文集
- ・氷川下セツルメント史編纂委員会 2014 「氷川下セツルメント史 半世紀にわたる活動の記録」エイデル研究所